

微笑みの奥の頑なさ

石原 誠

一通の手紙がある。やさしい手書きの文字であるが、少し弱々しい。日付は「4月18日」とある。文面には、手術の原因となった病状が詳細に書かれてある。天野先生から、4月15日の手術が無事終了した3日後に私宛に送られた手紙である。

総合政策学部では、新学科(国際政策学科と都市政策学科)開設直前の2009年3月31日に、初代学部長の天野先生と、総合政策学部開設準備担当の副学長であった遠藤惣一先生をお招きし、今一度本学部の開設の理念などを教職員にお話ししていただき、気持ちを引き締めて新学科をスタートさせたいと企画していた。ところがその前日に天野先生の奥様から急な入院で残念ながら参加できないことになったとお電話をいただき、その結果、遠藤先生お一人をお招きして懇談会を開催したのである。先生の病状を案じると同時に欠席を大変残念に思った。天野先生ご自身もこの懇談会を大変楽しみにされていたようで、新しい学部の発展への期待を述べたいとお考えであったことが手紙から伺うことができる。それからおよそ1年後に帰らぬ人となられたのである。総合政策学部のことを憂慮し、また大いに期待もされていた天野先生の叱咤激励の言葉をお聞きできなかったことは、その後の学部のあり方にも大きく影響したのではなからうか。本当に残念、無念である。

私は、総合政策学部の開設準備段階から教員人事や教務関係の担当職員として加わってきた。途中3年間の異動期間を除いて約20年に渡りこの学部と関わってきている。天野先生とは学部開設から先生のご退職までの7年間、様々な場面でご一緒させていただいた。そのうち大変印象に残っていることについてここにご紹介したい。

それは本学部の教職課程設置にまつわる話である。本学部は開設から4年間、すなわち1998年度までは教職課程が設置されていなかった。これは学部新設の教育課程上の制約のため、教職の認可申請を行わなかったためである。しかし、学部が進行するにつれ、学生からも教職課程設置の声が出始める。完成年度以降は教育課程の変更も可能となるため、学部内でも設置の方向で検討が始められることになった。学部開設3年目であったと思う。

教務担当者としては、本学部の性格上、高等学校の「公民」と中学校の「社会」であれば認可は十分可能と判断して、その2種の申請の準備を始めていた。ある日の学部長室委員会で「教職課程設置認可申請に関する件」として上記2種を申請予定である旨を報告した。すると即座に天野学部長から、「公民、社会はわかりますが、どうして英語の免許が取れないのですか？ 総合政策学部ではこれだけ英語教育を重視して実践しているじゃないですか。他大学でもこれほどの教育を実践しているところはありませんよ。できないはずはありません。ぜひ英語の教員免許の申請もしてください。」と珍しく強く言われた。私は「しかし、英語は学部の専門教育分野ではないので認可は無理だと思います。」と申し上げたが、天野先生は「そんなはずはありません。」と頑として聞き入れられなかった。その間のやり取りは、厳しいものではあったが、意見を述べられる先生のお顔はいつもの少し口元に微笑を含んだ穏やかな表情であった。会議の後で教務主任の安保先生から「学部長の意向を汲んで何とかやってほしい。」との言葉もあり、一念発起して「英語」の認可に向けて始動した。当時の教職課程室からも批判を受けたが、学部の教育課程も若干荒っぽいことはしたものの、認可申請にこぎつけ、その結果、「英語」も含めた教職課程を1999年度から開始することができた。天野先生はその時、にっこりと「ほらできた

でしょう。」とおっしゃったことを鮮明に記憶している。

2011年度卒業見込み者まで含むと在学中に「英語」の免許を取得した学生数は300名を超え、公民・社会の40名を大幅に上回っている。実際に英語教員の職にあるものも少なからずおり、活躍の声を聞く。あの時の天野先生の熱意ある言葉があったればこその実績である。上記のことは学部開設から今日までの間に起こった数知れない出来事や取り組みの中ではほんのささやかなことではあるが、研究者として磨かれた事の本質を見抜く鋭い洞察力で学部の運営にも多大なる貢献をされた天野先生の功績の一端をご紹介した。先生を知る方は容易にその状況、様子を窺い知ることができるかと推察する。天野先生の意を汲み、遺を繋げていくことが、長く関わった私の責務と感じている。ご冥福を祈りたい。

石原誠(いしはら まこと 関西学院大学総合政策学部 職員)